

2023年2月12日 降誕節第8主日礼拝

メッセージ「その腕で抱きとめるものは何か」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 5章 12-16 節

今回の聖書のお話は、短いお話でしたが、素直に読みますと、「規定の病を患っている人が、イエス様に清めてくださいとお願いして、清めてもらいました。めでたし、めでたし」と読めるのではないかと思います。更に「何でも出来る神の子であるにも拘わらず、そのことを言いふらさないように念を押すなんて、イエス様は謙虚な方だ」とも読めるのではないのでしょうか。私も初めて聖書に出会った頃は、そのように読んでいました。しかし、この物語が語っていることは、本当にそうなのでしょうか。

私たちが暮らしている現代は、イエス様がこの地上を歩まれた時代から、約2000年も経った、医学も科学も進歩した時代です。昔は命を落としていたような病気やケガであっても、その多くが治せるようになって来ました。しかし、それでもなお、治らない病気やケガがあり、毎年、毎日のように失われていく命があります。そのような現実の中で、私たちは時に「神様、御心ならば、この病気を癒してください」と祈り、そして病気が治らない時には、失望してしまいます。それこそ、「イエス様によって癒された人たちは、その信仰が立派だったから癒されたのであって、私は信仰が未熟だから、奉仕も献金も足りないから、癒されないんだ」と感じて、信仰が揺らいでしまうこともあるかもしれません……。本当に聖書は、そのようなことを告げているのでしょうか。丁寧に聖書の言葉を見ていくと、どうもそうではなさそうです。

まず「規定の病」と翻訳されている言葉ですが、かつて古くは「らい病」と訳されていました。ご存じの方も多いかと思いますが、「ハンセン病」です。日本でもハンセン病にかかった人を自宅から強制隔離して「療養所」に有無を言わず収容するという人権を侵害する法律が、27年前までありました。しかし、聖書に書かれているこの言葉、ギリシャ語で「レプラ」、ヘブライ語で「ツァーラアト」は、正しくは「ハンセン病」ではないということが分かっています。ヘブライ語聖書(旧約聖書)の「レビ記」13章 14章に詳しく書かれていますが、これは人間だけにではなく、衣服にも、家の壁などにも生じる、いわゆる「かび」のようなものであり、古代イスラエル社会における宗教的・祭儀的に「汚れ」と見なされる症状の総称だと考えられています。

その他、「清い」か「汚れ」ているかの判断を下すのは、祭司の役目とされていましたが、皮膚に表れた症状によって、「汚れている」と宣言されたり、その後自然に

清くなったり、さらには「清くなった」と宣言されてから再び「汚れている」と宣言される状態になったりすることもあったようです。そのためにこの「レプラ」「ツァーラアト」は、「ハンセン病」ではないことは明らかであり、以前の新共同訳では「らい病」ではなく、「重い皮膚病」と訳されました。しかし、この翻訳も「アトピー性皮膚炎」などの皮膚疾患を持つ方々に対する配慮に欠けるものだったので、今の聖書協会共同訳では、律法に定められている病気ということで「既定の病」と訳し直されています。とはいえ、そもそも「レプラ」「ツァーラアト」は、「病気」ではなく「状態」を表わしていますので、その翻訳もあまり適切とは言えず、そのまま「レプラ」「ツァーラアト」とカタカナで表現することも多くなってきています。

もう一つ、この箇所で注意したいのは、「癒す」という言葉が、実は本文のどこにもない、ということです。以前の新共同訳聖書では、小見出しに「重い皮膚病を患っている人を癒す」と書かれていましたが、聖書協会共同訳では「規定の病を患っている人を清める」と改められています。つまり、このお話は「病気の癒し」の物語ではない、ということです。「いやし」という言葉からは、「治癒」や「治療」というように、「病気が治る」ということが連想されますが、この人はイエス様に「主よ、お望みならば、私を清くすることがおできになります」（12）と頼み、イエス様は「私は望む。清くなれ」（13）と言って、その人から「規定の病は去」（13）りました。ですから、この人は病気を治してもらったのではなく、「清く」してもらったのでした。

ヘブライ語聖書の「レビ記」には、この「ツァーラアト」の他にも、「どの食べ物は清いから食べてもよいが、どの食べ物は汚れているから食べてはならない」など、様々な清さと汚れに関する「清浄規定」があります。それが数百年後のイエス様の時代には、とても重要視されていたようです。「安息日を守らない人は汚れている」「手を洗わないで食事をする人は汚れている」「汚れている罪人たちと一緒に交際したり、食事をしたりする人は汚れている」……。どれも律法学者たちやファリサイ派たちからイエス様が批判された事柄でした。なぜならイエス様は、人々を分け隔てる律法を大切にしたのではなく、その向こう側にある人々そのものを大切にされたからでした。

現代でもそうです。特定の地域の出身者を差別したり、特定の職業の人を差別したり、決して感染しないということが分かっているにもかかわらず、病気や障がいの人を差別したりすることが、残念ながら続いています。確かに人権意識の高まりと共に、現代社会ではそれらは減ってきたり、見えにくくなってきたりしているようにも感じます。しかし、約 2000 年前の古代イスラエル社会ではそのような差別、隔離が、もっともっと明白でした。そして、この「レプラ」「ツァーラアト」の状態にな

った人は、宗教的・祭儀的な「汚れ」をうつさないために、人々から隔離されるようにと律法には定められていました(レビ 13)。つまり言い換えますと、「清い」とは社会の一員として共同体の内側にいる状態であり、「汚れ」とはその共同体から外側に排除された状態であったとすることができるとおもいます。

そしてこの人と出会ったイエス様が、どのようにされたかと言うと、13 節には「手を差し伸べて、その人に触れ」と書かれています。元のギリシャ語の言葉(ハプト)は「抱きつく、ハグする、しがみつく」という言葉ですから、実際には軽くタッチして触ったのではなく、その人の体全体に腕を回してギュッと抱きしめたというのが、正しい表現であり、そのように翻訳している聖書もあります(本田訳)。日本では、挨拶の場面ではハグする光景はあまり見かけませんが、世界では挨拶でハグすることは少なくないかとおもいますし、もちろん「汚れている」と差別されている人とは、ハグなんてしない、ということだったのでしょ。

そしてイエス様はその人を抱きしめながら「私は望む。清くなれ」と言われました。先ほど、「清い」とは、共同体の内側にいる状態、仲間、内輪である状態であり、反対に「汚れ」とはそこから除外されて「仲間はずれ」にされている状態だと確認しました。すると、このイエス様の言葉「私は望む。清くなれ」は、体の病気を癒す魔法の言葉や呪文なのではなく、共同体から仲間はずれにされ、差別され、人々から見向きもされない状態になってしまっていた人に対して、「大丈夫。あなたも私の大事な仲間だよ。私はあなたを見捨てない」といって、再び共同体の一員であることを宣言する言葉だったのでないかとおもいます。

ほとんどの人々が文字を読み書きすることができず、口伝で出来事を伝えていた 2000 年前の時代です。後に福音書に書き記された物語としては、その後「たちまちレプラ(既定の病)は去った」とありますが、実際はどうだったのかは分かりません。しかし、社会の中で差別され、孤独の中に絶望していた人が、イエス様と出会い、勇気を出してイエス様に声をかけたら、思いがけず抱きしめてもらって「大丈夫。あなたも私の大事な仲間だよ。私はあなたを見捨てない。自分でも自分自身を諦めて、疎外してしまわずに。私と一緒に生きよう」と言われたのだとしたら、それは暗闇の中に光が射し、倒れていたのに引き起こされ、死んでいたのに生き返り、イエス様に従う者としての新しい命を生き始めるという大きな出来事であったに違いありません。

イエス様はその腕で、このレプラの人を抱きしめました。私たちはこの腕で日々、何を抱きしめ、抱きとめているでしょうか。仕事や家族、責任や立場、肩書やお金など、様々なものが私たちの腕の中や、肩の上には載っているような気がします。

そしてそれらは「決して手放さないように」と言われているように感じていますが、何かを掴み、抱きとめるためには、今握り込み、抱え込んでいるものを一旦手放す必要があります。

イエス様は弟子たちを派遣するに当たって「杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして『下着は二枚着てはならない』と命じられ」（マルコ 6:8 並行）しました。また「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」（ルカ 9:58、マタイ 8:20）とも言われています。ここで述べられている「狐」とは、権力と富を持ち、人々を搾取して暮らしていた領主ヘロデのことであり、「鳥の巣」とはガリラヤの村々から見上げる丘の上に築かれていたセツフォリスの都のことでした（山口雅弘『ガリラヤに生きたイエス』202-203 頁、山口里子『イエスの譬え話1』22 頁）。権力者たちには贅沢な住まいも寝床も食事もあるけれども、貧しい自分達にはそんなものは何もない、という当時の人々の皮肉を込めた言い回しです。旅に出るにあたって「何も持って行ってはいけない」のではなく、そもそも何も持っていなかったのです。だからこそ、いつでも目の前の人を抱きとめることが出来た。目の前の人困っている様子に、目が行き、心が動くことができたのではないのでしょうか。

先日 6 日に、トルコ南部のシリア国境付近発生した大地震によって、多くの被害が出ています。世界各国から救助隊が応援に駆けつけ、連日の救助活動が行われていますが、すでに死者は 2 万 4000 人を超えたとも報じられていました。被災された方々の救助活動や救援活動が、滞ることなく行われますようにと祈ると共に、私たちにできることも考えていきたいと思えます。

大災害の後には、誰かが言い出すわけでもなく、自然と見ず知らずの人々が互いを助け合うような「災害ユートピア」と呼ばれる状況が生まれるそうです。世界中で見られる現象のようですが、それも皆がそれぞれに腕の中に抱え込んでいるもの全てを、一旦下ろしたからこそ、周りの人々の姿も見えるようになった。多くの人たちの命が失われた中、自身の命は助かったという奇跡を体験したからこそ、本当に大切なものと、そうではないものの区別がつけられるようになった、ということなのかもしれません。

私たちがその腕で抱きとめているものは、一体何でしょうか。またこれから抱きとめようとするものは、何でしょうか。イエス様と共にあって、私たちも目と心を開かれて、そしてこの手の中に握りしめているものも開かれて、本当に大切なものを抱きとめる歩みへと導かれていきます。